

# 開発的カウンセリングを生かした 初年次教育プログラムの展開

米田 薫<sup>1</sup>  
大阪青山大学

## Development of the First-Year Experience Programs Utilizing Counseling

Kaoru YONEDA  
Osaka Aoyama University

教育分野のカウンセリングは、これまでの問題解決的側面を主とするものから、予防・開発的側面を重視する方向に変化している。大阪青山大学健康こども学科は、教育目標の達成のために初年次教育科目においてカウンセリングの知見やスキルを導入することが有効であると考え、カウンセリング心理学を専門とする教員が主となって企画・運営し、初年次生の「学業」「キャリア」「個人-社会の適応」面での成功をサポートするべく実践の充実を図ってきた。「学業」領域の取組みとしてアカデミックスキルの習得を目標とする「学修基礎演習Ⅰ・Ⅱ」を、「キャリア」「個人-社会の適応」領域の取組みとして大学生活への円滑な移行やキャリア教育、専門教育の導入を目的とする「健康子ども学基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ」を実施した。初年次学生に対して入学時と前期末に自己評価させたところ、「期待度」「満足度」「意欲」「目標」「ソーシャルスキル」に関して上昇がみられ、有意差が認められた。又、「学修基礎演習Ⅰ」の課題レポートに関してもピアリーダーや教員のサポートによって得点の上昇がみられた。本研究によりカウンセリングを生かした初年次教育の実践の有効性が示唆された。

〔キーワード〕：カウンセリング，人間関係の形成，ピアリーダー，ポートフォリオ

### 1. カウンセリングを生かした初年次教育

教育分野のカウンセリングは「学業」「キャリア」「個人-社会の適応」領域から成り、「問題解決」「予防」「開発」的側面がある。1950年代の草創期には「個人-社会の適応」の「問題解決」を主とする活動が中心であったが、現在は3領域に渡る「予防」「開発」的側面の充実が図られており、その知見やスキルを大学初年次教育に活用することは検討に値すると思われる。例えば、初年次教育の目的の一つである大学への円滑な適応には、学修に関する適応と大学生活に関する適応があるが、カウンセリングは学修面においてアカデミックスキルの習得やキャリア教育、自己分析の手法、協調的な学習集団の形成といった点で貢献できる。また、大学生活の適応については、人間関係の確立と維持に関して教育で活かすカウンセリングの代表的な手法である構成的グループエンカウンターをはじめとする人間関係づくりの技法や、社会への適応を促進するソーシャルスキル教育が貢献できると考えられる。特に人間関係づくりは入学後の「ラーニングコミュニティ」の形成に向けて重要であり、教育領域のカウンセリングは初年次教育に幅広く資することが期待できる。さらにカウンセリングは、アセスメントと目標設定、目標に従った計画の立案と実施、評価と改善のプロセスを重視する点で教育と共通しており、両者には親和性があると

<sup>1</sup> 大阪青山大学健康科学部（機関会員） k-yoneda@osaka-aoyama.ac.jp

言える。これまでにライフスキルトレーニングを導入した「個人-社会の適応」領域の初年次プログラム(皆川・阿部・早川・長谷川・木村・真下, 2009)や「学業」「キャリア」領域で学習スキルとキャリア教育の融合を図る実践(手嶋・川崎・小松, 2008)が報告されているが、開発的カウンセリングの3領域を総合的に捉えた初年次教育は実践されていない。

2008年度に設置された大阪青山大学健康こども学科は、「子どもの変化をみつめ、子どもの育ちに正対する新時代の指導者の育成」を教育理念として、教育目標として1)子どもの係る幅広い学びと実践に資する学び, 2)人間力, 3)自立の大項目を定め, 1)に関しては中項目を「現場で役立つ専門性」「時代が求める健康こども学」, 下位項目を「興味・関心」「知識・理解」「スキル・表現・体力」, 2)に関しては「課題解決能力『課題発見力(見つける力)』『情報収集・整理能力(集める力)』『思考・判断力/構想力(広げる力・まとめる力)』『コミュニケーション力・交渉力・調整力』『人間関係能力『プレゼンテーション・情報発信力・自己表現力』『リーダーシップ・集団形成能力』『感性と芸術的表現力」, 3)に関しては「豊かな心『広い心(協調性)』『愛のある心(貢献)』『やわらかな心(対応力)』『正しさを貫ける心(順法性・人権)』『自律性・主体性『キャリア設計・遂行能力』『自他理解・自己評価・自己受容』『意思決定能力』『自己管理・自己責任』『社会貢献」と設定し、学科の教育の充実を図ってきた。

中でも、本学科は教育目標の達成のためには初年次教育科目にカウンセリングの知見やスキルを導入することが有効であると考え、カウンセリング心理学を専門とする教員が主となって企画・運営し、初年次生の「学業」「キャリア」「個人-社会の適応」面での成功をサポートするべく実践されてきた。大学で幅広い教養と深い専門知識の学びを保障するためには、その教育活動の基盤となる円滑な人間関係が必要である。本学科では、学科の目標を実現するために策定したベンチマークを基にして、初年次教育を立案する際に「学びの共同体」であるラーニングコミュニティの形成を視野に入れ、大学という新しい環境の中での人間関係を構築することを優先課題と捉え、人間関係の形成を重視したプログラムを策定した。

## 2. カウンセリングを生かした初年次教育の実践

### (1) 初年次教育科目に適用されたカウンセリング技法

初年次教育科目として、キャリア教育や自己理解、専門教育への導入を目的とする「健康こども学基礎ゼミナール I」と、大学での学修に関する適応を図るためにレポート作成に係るアカデミックスキルの習得を目的とする「学修基礎演習 I」を設定した。

初年次生の円滑な大学生活への移行を目指す具体的な内容として、まず入学式直後の早期から、自他発見とふれあいのある人間関係の形成を目的とするカウンセリング技法である「構成的グループエンカウンター」を適用し、新入生の人間関係形成の促進を図った。授業開始後は「健康こども基礎ゼミナール I」において、カウンセリングの自己分析の手法を用いて自他理解を深めるとともに、よりよいキャリア形成をめざしたワークや外部のリソースを生かして職業キャリアの形成を促進する取り組み、専門教育への導入の講義を行った。キャリア教育に関しては「解決志向アプローチ」を導入し、「解決像(長期目標)」と「リソース(資質・資源)」を明確化して具体的な「ゴール(短期目標)」を設定する枠組みで「学修ポートフォリオ」の作成を指導した。

これらの初年次教育科目を担当する教員4名は、授業実践を高めるために毎週ミーティ

ングを開き、各回の授業の目標と展開を共有し、役割分担してチームティーチング方式で授業を展開した。必要に応じて、例えば毎週の個人面談に際してはカウンセリングを生かした効果的な面談ができるように教員団のFDを実施した。

## (2) 初年次教育科目で展開されたアクティブラーニング

学科の教育目標の一つである自律性を高めるために、授業にアクティブラーニングの手法を取り入れた。アクティブラーニングの手法として、話し合いを活性化させるために3ステップインタビューやラウンドロビン、ワールドカフェ、ジグソー学習を採用した。

3ステップインタビューは構成的グループエンカウンターでいう「他己紹介」と言われるエクササイズである。ペアを作成して与えられたテーマについて設定された時間内に相互にインタビューし、その内容を二つのペアを併せて4人グループになって他のペアに紹介するもので、「健康こども学基礎ゼミナールⅠ」の時間に毎回設定している。毎回異なる学生とペアになって話し合うことで人間関係を形成し、コミュニケーション能力を高めることをねらいとしている。このエクササイズは、本学科の学生がオープンキャンパスや高校向け学科説明会で、学科の特徴を「同級生全員と話す機会があつて仲が良い」ことと語り、その理由を「入学時から人間関係づくりの取り組みが多くなされているから」と説明することにつながっていると思われる。

同じく、ラウンドロビンは構造化したブレインストーミングと言われる手法で、小グループで輪になって集まり、順番に考えを出して回することで全員の発言を保障しつつ話し合いを活性化させるものである。「大学生活の目標」「学修ポートフォリオに取り組んで得たことと課題」といったテーマでピアリーダーの司会の基に進行させた。「べつに」「わかりません」といった発言を許さずに、「まとまった考えでなくてもよいので発言を」とピアリーダーがグループ全員に促すことを指示し、授業を活性化することができた。

同様に、ワールドカフェはテーマにそって小グループで話し合った内容を各グループ一人ずつが集まった別グループで交流し、その後、元のグループに戻って振り返る手法で、「多くの人と真剣に話し合った充実感を覚えた」という学生の声に代表されるように、間接的に多くの参加者の意見に耳を傾け、発言する体験ができる手法である。

ジグソー学習は分担したテーマについて詳しく学習したことを互いに教えあつて全体を学習する手法で、協同学習の形態の一つと言える。「発表するテーマについて責任を感じて頑張ったから、1年経っても発表した箇所は教えられる。」と2年次生が言うように、仲間に教えることを通じて分担した部分について深く学ぶことを促し、深く学ぶ体験が分担した以外の部分の理解にも良い影響を与える。

教え合いの技法として初年次教育科目で用いた他の手法は、各自の思考を視覚化して問題解決能力を高めるためにマインドマップ、グルーピングチャート、ペイオフマトリクス法、各自でノートを取った後にペアを組んだ相手と比較して改定版を作つてノートテイキングの能力を高めるペア・ノートテイキング、ロールプレイがある。

## (3) ピアリーダーを活用したアカデミックスキルの習得

もうひとつの初年次教育科目である「学修基礎演習Ⅰ」はアカデミックスキルの習得を目指す科目で、「知へのステップ」(2006)をテキストとして、大学での学びに必要とされる学習に関するスキルを毎回の講義でワークシートに取り組むことで定着を図っていく。また、「子どもを取り巻く諸問題」をテーマとする2000字のレポートを作成する課題に取

り組むことによって、専門領域の学修に対する意欲や関心を喚起することもねらいとしている。毎回与えられるワークシートは担当教員が採点して翌週に返却し、不備な点は修正して再提出すれば再評価し、レポート提出は成績上位の上級生のピアリーダーの一次添削、担当教員による二次添削を経て最終提出するようにして、初年次生全員が「学生生活の成功」を体験できるように構成した。

また、学生生活の目標と計画、成果物と評価を綴じて自己成長を促すファイルである「学修ポートフォリオ」を作成し、その成果物の蓄積として「週間報告」を課題にし、教員と定期的に面談する機会を設定し、新入生－教員間の人間関係の形成に努めた。

さらに、これらの初年次教育の円滑な展開を図るために、初年次生をサポートする学生スタッフであるピアリーダーを育成している。ピアリーダーは2年次生の成績上位の希望者を対象とする選択科目である「リーダーシップ特論」を受講する学生である。彼らには、前期開始前にリーダーシップやアクティブラーニングに関する集中講義を実施し、学期開始と同時に新入生のサポートにあたらせている。具体的には、「健康こども学基礎ゼミナール I」に毎時間参加させ、グループワークのリードや学修ポートフォリオやレポート作成のアドバイス、日常の大学生生活の疑問の解消といったサポートである。

### 3. 実践の成果

初年次教育の効果測定の一助とするために、2009年度の初年次学生に対して、入学時と前期末に「大学生生活に対する期待度」「大学生生活の満足度」「人生に対する意欲」「人生や大学生生活の目標の明確さ」「大学生生活に対する不安」を10点で自己評価させ、それぞれの項目の具体的な内容を自由記述するアンケートを実施した。学科在籍者31名中、すべてのデータが収集された初年次生27名を対象に入学時と前期末を比較したところ、「大学生生活期待度」「入学満足度」「人生への意欲」「目標」に関して上昇がみられ、「不安」は減少した。入学時と前期末の2群間で各質問項目における評点の母平均の差に有意差が認められるかどうかを対応のあるt検定により確認した。有意水準を $p < .05$ とし、有意の確率が $p < .10$ の場合は「傾向がある」と判断した。その結果、期待度、満足度、意欲、目標に有意差が、不安に関して有意傾向が認められた(表1)。

表1 学生生活アンケートの項目別平均点とt検定の結果(N=27)

	入学時	前期末	t 値 (df=26)
期待度	5.89	6.71	2.219*
満足度	5.68	6.96	2.986**
意欲	5.96	6.86	2.105*
目標	5.96	6.82	2.162*
不安	6.29	4.89	1.848†

† :  $p < .10$ , \* :  $p < .05$ , \*\* :  $p < .01$

自由記述に関しては、意欲面で得点の低い学生の自由記述を見ると「少し中だるみしている(4点)」「やりたいことが見つからない(3点)」と言った記述もあるものの、「大学で残って勉強したり初めてのアルバイトで疲れて」、「とりあえず今の学生生活を充実させることで精いっぱいだから(3点)」といった学生生活への適応で手一杯で他のことに関して意欲を喚起することができていないと自己評価する学生や、「何をしても中途半端になってい

るから(4点)」「独り立ちしようと思っているが、助けられてばかりだから(3点)」と厳しい自己評価を下している学生が少なくないことが明らかになった。

同時期に、生活の様々な場面での行動に関する「自己遂行可能感」や社会生活上の知識や技能に対する自己評価を測定するために、「一般性セルフ・エフィカシー尺度」と「KiSS-18」を実施した。「一般性セルフ・エフィカシー尺度」(1993)は Bandura が提唱した社会的学習理論に基づく「ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信」であるセルフ・エフィカシーを測定する尺度である。「KiSS-18」は菊池(1998)が作成した若者のソーシャルスキルを測定する尺度である。若者にとって必要な社会的スキルを分析したゴールドSTEINらの分類した 1) 初歩的なスキル, 2) 高度なスキル, 3) 感情処理のスキル, 4) 攻撃に代わるスキル, 5) ストレスを処理するスキル, 6) 計画のスキルのリストをもとに 18 項目, 5 件法で構成されている。菊池(2007)によれば, 対人関係やコミュニケーション, 職場環境, 看護教育, 青少年の性行動, トレーニングの効果測定と幅広く適用されている尺度である。

入学時と前期末を比較したところ, 両者とも上昇がみられた(表 2)。

表 2 初年次生セルフ・エフィカシー及びソーシャルスキル尺度得点の変化(N=27)

	入学時	1 年次前期末
セルフ・エフィカシー	6.2	6.8
ソーシャルスキル	57.0	59.3

それぞれの入学時と前期末間で対応のある  $t$  検定を行ったところ, 「一般性セルフ・エフィカシー尺度」得点に関しては有意な違いはなかったが( $t(26) = 1.258$ ), 「KiSS-18」尺度得点には有意差が認められた( $t(26) = 2.053, p < .05$ )。初年次生の自己評価は大学生活の様々な要因によって形成されるが, KiSS-18 の得点が入学時から前期末にかけて有意に上昇したことは, 初年次教育科目で実施した人間関係形成に係る取組みが社会的スキルに関する自己評価を向上させることに一定の寄与があったことを示唆していると考えられる。

本実践のその他の指標として, 初年次学生の大学生活への円滑な移行をめざす初年次教育の取り組みは入学式当日から開始されているが, 初年次学生へのアンケートの結果から「名前がわかる同級生数」が入学前は平均 1.0 人であったが, 3 日間のオリエンテーション後には 13.4 人に上昇し, 一定のリレーションが形成されていることが示唆された。

学修面でのサポートが教育領域で活かすカウンセリングの一つの領域であることは先述した。アカデミックスキルについては, 前期の「学修基礎演習 I」において 2000 字程度の専門領域のレポートを課題に課し, レポートの作成計画の立案から指導している。2008 年度はピアリーダーと担当教員が受講者のレポートへの書きこみや付箋を貼付して間接的なアドバイスを行ったが, 2009 年度は当該科目を「アカデミックスキルの習得の要」と位置づけ, 事前に採点基準表を配布した上でそれに基づくチェックシートを作成し, アドバイスは受講生一人ずつとの面談の時間を設定して直接指導するようにした。面談時には, チェックシートを介してアドバイスを行い, そのシートは手交して次回提出時にはアドバイスされた個所を修正したことを確認して提出するよう求め, 上級生のピアリーダーによる一次添削, 担当教員による二次添削の後, 最終提出するシステムでレポート指導を進めていった。ピアリーダーによる添削とアドバイスはレポートの構成に関することに限定し, 内容については関与していない。

その結果、当初受講者 31 名のうち、最終次レポートまで提出した 29 名の平均点は初回提出時の 17.4 点から最終提出時には 44.3 点と上昇し(図 1)、出席不足による 60 点未満の「不可」はなく、70 点未満の「可」は 3 名で残る 26 名は「良」又は「優」評価となった。

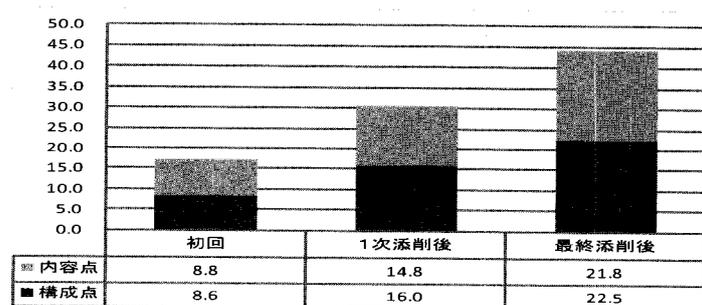


図 1 学修基礎演習レポート得点の変化(N=29)

以上の結果は、授業手法に対する直接的な評価ではないが、実践した初年次教育プログラムの有効性を示唆していると考えられる。

これらの前期の初年次教育の 2 科目の成果を受けて、後期にはグループワークを主体とする「健康こども学基礎ゼミナール II」とコモンリーディングやパブリックスピーチを柱とする「学修基礎演習 II」の 2 科目を設定して初年次生のさらなる資質の向上を図っている。前者は教育に活かすカウンセリングの「キャリア、個人-社会関係」領域への適用を、後者は「学業」領域でのカウンセリングの知見を活用して展開している。

#### 4. カウンセリングを生かした本学科の初年次教育の今後

今後の本学科の初年次教育の課題について考察する。

第一に、「キャリア」領域の充実である。文部科学省(2010)は最近の「超就職氷河期」とも揶揄される大学等卒業予定者の就職内定状況に対応するために、「大学等へ就職相談員(キャリアカウンセラー等)を配置するなど大学等の就職相談体制の強化を図るとともに、学生の卒業後の社会的・職業的自立につながる教育課程内外にわたる大学等の取組(キャリアガイダンス)の推進」を図ろうとし、職業指導(キャリアガイダンス)を法令で明確化しようとしている。高等教育において一般教育と専門教育をつなぐ位置に置かれる職業指導(キャリアガイダンス)は、「学生が、入学時から自らの職業観、勤労観を培い、社会人として必要な資質能力を形成していくことができるよう、教育課程内外にわたり、授業科目の選択等の履修指導、相談、その他助言、情報提供等を段階に応じて行い、これにより、学生が自ら向上することを大学の教育活動全体を通じて支援する」と定義されており、人生キャリアを対象とするキャリア教育の一部であると言える。本論の初年次教育の実践においてもキャリア教育に取り組み、学生個人のキャリア計画の立案とポートフォリオの作成、自己分析やジェネリックスキルの向上、職業体験実習、進路支援センター職員によるキャリアガイダンスを行っているが、4 年間の教育課程全体を見通したキャリア教育が必要である。

第二に、「学業」領域でのさらなるサポートが必要である。当初は、初年次生全員が「学生生活の成功」を体感できるように最低でも「良」の成績が獲得できることを指導目標としたが、「不可」の学生はいなかったものの、受講者 31 名中 4 名の「可」の学生がおり課

題を残した。教員団の総括として「知へのステップ」を補完する教材群の作成の必要性が挙げられている。

第三に「個人-社会関係の適応」を図る取組みの推進である。そのためにまずソーシャルスキル教育を充実させる必要がある。近年、小・中・高等学校において「ピアサポート」をはじめとするソーシャルスキル教育が展開されるようになってきているが、人間関係形成に関するスキルや課題発見・問題解決スキルといったソーシャルスキルは大学生にも高いレベルで求められるものである。菊池(1998)は、KiSS-18の尺度得点として大学生男子 56.40、大学生女子 58.35 が平均値であることを示しているが、本学科は教育・保育領域の進路を希望する学生が多く、対人援助の専門性を高めるために更なる向上が求められており、この点に関して教育に活かすカウンセリングはさらに貢献ができる分野であると思われる。

このソーシャルスキル教育の充実と並行して重要となる課題は、習得したスキルを伸ばさせるための場を設定することである。課題発見・問題解決に関するスキルをはじめとして、獲得したスキルも般化する場がないと定着しない。大学生活の中で、獲得したスキルを発揮する場がふんだんに準備されている必要がある。そのためにプロジェクト・ベースド・ラーニング(PBL)やサービスマーケティングを継続的に導入する必要がある。

また、リーダーシップに係る資質を向上させる取組みの強化が必要である。これは初年次教育の成功を支えるスタッフの養成という面でも、2年次生以上の学生が初年次教育で伸ばした資質を総合的に発揮するためにも組織的に取り組む必要がある。本学科では、2年次生の希望する学生に「リーダーシップ特論」を実施し、初年次生の人間関係形成やアカデミックスキルの習得をサポートする「ピアリーダー」制度を実施しているが、さらに長期的にリーダーシップを養成する充実したプログラムに発展させることが求められる。

第四に、学生の成長を支えるカリキュラムの改善とそれに伴う評価の充実である。本学科では2011年度から「健康こども学基礎ゼミナールⅠ」を、大学への円滑な適応とキャリア形成を目的とする「キャリアデザイン」と専門教育への導入を図る「健康こども学基礎ゼミナールⅠ」に分割し、これに従来から実施している「学習基礎演習Ⅰ」と1年次前期に3コマの初年次教育科目を実施して充実を図っていく。今後も学生の現状と大学教育の課題を踏まえた教育指導計画の立案、実施、評価と改善を重ねていくことが求められている。

こうした改善を推進する際に欠かせないことが、多様な評価の充実である。小方(2008)は、大学教員が単位認定の際に求める要件を1992年と2007年と比較したところ、授業への出席が66.6%から75.8%、小論文の提出が41.0%から50.2%、口頭での発表が28.9%から39.6%、クラス討議への参加が20.3%から36.0%と15年間の間に参加型の手法を取り入れる教員が増加しており、多様な手法の評価が拡大していることを明らかにした。「健康こども学基礎ゼミナールⅠ」では、学修ポートフォリオによる評価を学生に評価基準を細かく示した上で実施し、多様な評価を実現している。我が国の小学校・中学校・高等学校においては「関心・意欲」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の4側面における多様な評価が実施されているが、大学で実施されている教育評価は「知識・理解」に重心の偏りがあり、他の側面を評価に取り入れる動きが鈍いのが実情である。本学科では初年次教育科目における多様な評価は進展したが、すべての科目に必要であると考えられる。近年、高等教育の質保証という観点から大学改革は重要なテーマであるが、どのように大学教育の質を評価するかは課題となってきた。これまで卒業率や就職率、資格試験の合格率といった定量的な指標で示されてきたが、新たな指標のひとつとしてジェネリックスキルがあ

る。ジェネリックスキルはどんな職業にも転移可能な汎用的能力を示す概念で、文部科学省が示しているキャリア教育の「職業的(進路)発達にかかわる諸能力(2003)」や経済産業省の「社会人基礎力(2006)」はジェネリックスキルを示す指標と言える。本学科が提示しているベンチマークシートもそのひとつであると言えるが、専門科目を含めて初年次教育科目以外にもベンチマークシートによる評価を取り入れて授業改革を進める必要がある。多様な学生を受け入れるユニバーサル・アクセス段階の大学として、評価を多様化し、学生の成長を多角的に評価できるように改善する必要がある。

## 5. まとめ

松本(2009)は、「どのような学問的モデルを基盤において初年次教育プログラムを構築し、学生を指導すべきか」との視点が重要であることを指摘し、その学問的モデルとしてコミュニケーション教育学の知見を適用した実践を展開している。本論文は、カウンセリングの理論と技法を活用した大阪青山大学健康子ども学科における初年次教育の実践を記述し、初年次教育のモデルケースの一つとしての可能性を示唆することができた。今後、それぞれの初年次教育科目の効果検証を含め、実践と研究の連環を計り、カウンセリング心理学をひとつのベースとする初年次教育のモデルを確立していきたい。

## 参考文献

- American School Counselor Association 中野良顕(訳)(2004)『スクール・カウンセリングの国家モデル米国の能力開発型プログラムの枠組み』学文社 (American School Counselor Association (2003) *The ASCA national model: A framework for school counseling programs.* American School Counselor Association)
- 学習技術研究会(編)(2006)『知へのステップ』くろしお出版
- 川嶋太津夫(2006)「初年次教育の意味と意義」濱名 篤・川嶋太津夫(編)『初年次教育』丸善, pp.1-12.
- 菊池章夫(1998)『思いやりを科学する』川島書店
- 菊池章夫(2007)『社会的スキルを測る: KiSS-18ハンドブック』川島書店
- 松本 茂(2009)「初年次教育の学問的基盤に関する考察—コミュニケーション教育学の可能性—」『初年次教育学会誌』, 2(1), 48-55.
- 皆川興栄・阿部一佳・早川武彦・長谷川博幸・木村光太郎・真下英二(2009)「初年次教育におけるライフスキルトレーニング・プログラムの開発(第1報)」『尚美学園大学総合政策研究紀要』, 18, 165-198.
- 本明 寛・東條光彦・坂野雄二(1993)「セルフ・エフィカシー尺度」上里一郎(監)『心理アセスメントハンドブック』西村書店, pp. 425- 434.
- 文部科学省中央教育審議会(2005)『我が国の高等教育の将来像(答申)』
- 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室(2010)『大学における教育内容等の改革状況について(平成20年度)』
- 小方直幸(2008)「学習感—大衆化への対応—」有本 章(編)『変貌する日本の大学教授職』玉川大学出版部, pp.111-122.
- 手嶋英貴・川崎千加・小松泰信(2008)「大学1年生を対象とする学習スキルとキャリア教育の融合—大阪女学院大学「自己形成スキル」の試みから—」『大阪女学院大学紀要』, 5, 119-144.